



悪役聖女転生？ だが断る

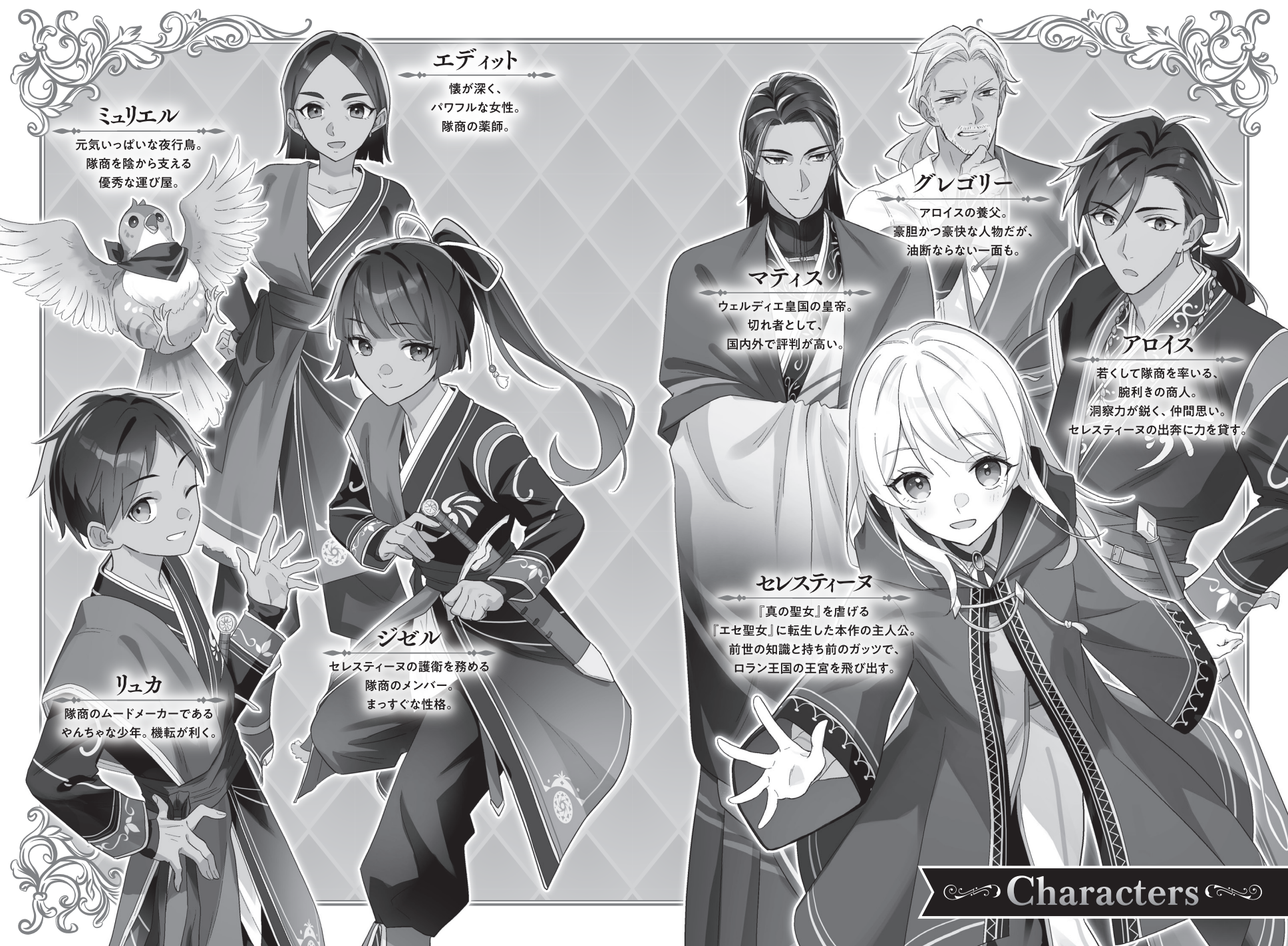
2

Tohru Himura

日村 透

Illust.

ふおむなんと



ミュリエル

元気いっぱいな夜行鳥。
隊商を陰から支える
優秀な運び屋。

エディット

懐が深く、
パワフルな女性。
隊商の薬師。

グレゴリー

アロイスの養父。
豪胆かつ豪快な人物だが、
油断ならない一面も。

マティス

ウェルディエ皇国の皇帝。
切れ者として、
国内外で評判が高い。

アロイス

若くして隊商を率いる、
腕利きの商人。
洞察力が鋭く、仲間思い。
セレスティーヌの出奔に力を貸す。

ジゼル

セレスティーヌの護衛を務める
隊商のメンバー。
まっすぐな性格。

リュカ

隊商のムードメーカーである
やんちゃな少年。機転が利く。

セレスティーヌ

『真の聖女』を虐げる
『エセ聖女』に転生した本作の主人公。
前世の知識と持ち前のガッツで、
ロラン王国の王宮を飛び出す。

プロローグ

ふわりと通り抜けた風に誘われ、ふと後ろを振り返った。

ウエルディエ皇国^{こうごく}を屈指し、これまでずっと進んできた古い石畳^{いしだみ}の道。その先は丈^{たけ}の短い草の中に見え隠れしており、さらに奥には険しい岩山^{けね}がぼんやりと霞^{かすみ}んでいる。

あの山を越えたずっと向こうに、私の故郷——ロラン王国^{みやくこ}の都があるのだ。

「こうして見ると、改めて遠い道のりでしたのね……」

思えば私の旅は都を出た瞬間ではなく、もっと前から始まっていた。

誰もが形ばかりの祭事^{まつり}と想っていたはずの聖女^{せいじょ}召喚^{しょうわん}の儀式で、本当に異世界の乙女^{おとめ}が出現したあの日、彼女は私の遠い記憶^{きおく}を呼び覚ますトリガーとなった。

ここはどうやら、前世の母親が書いた恋愛小説、『愛と祈りの導き^{みちび}を』の世界——
そして私の役どころは、主人公である異世界の乙女にさんざん嫌がらせをしたあげく、断罪されることなく事故で他界する悪役聖女セレスティーヌだったのだ。

『あらまあ……どういたしましたよう。困ったこと』

いきなりそんな記憶に出てこられたって、反応に困る。

けれど物語における自分の役割を自覚したおかげか、私はすぐに察することができた。

——そもそも、悪役聖女セレスティーナの置かれていた環境自体がおかしかったのだと。
『瑠璃』という名前だったはずの主人公が何故か『リリ』と名乗り、あからさまに王子を落とそうと狙っていたことはまだいい。

事実上の婚約者たる王子は、伝説の召喚聖女が現れた途端、あっさりそちらに乗り換えた。さらには私を偽りの聖女に育て上げ、毎日毎日こき使ってくれたロラン王国の国王と大神官。世話係だった神官は「神殿に忠実であるべし」と刷り込んでくる洗脳装置だったし。

王宮侍女は主人である私の前で堂々と不満を顔に出し、こっそり仕事の手を抜くような人達だった。

私、聖女やめよう。もうやってられない。

本物の聖女が出てきた途端、手の平を返した人達のために、これ以上ロラン王国のための聖女としてふるまいたくない……！

その一心で王宮を飛び出し、今も隣に立つ青年と、そして彼の仲間達に助けられ、私は今日ここにいます。

「一ヶ月強つてのは、俺達にとつてよくある長さなんだが。思い返してみたら、いつもより長い旅路だった気がするな」

アロイス・オベール——十八歳の私より五つ年上の、ウェルディエ皇国の大商人。

本来の物語なら王宮から追放された主人公を拾い、彼女とともに旅に出るはずだった人物。

「ヒーローが商人だとレーベルに合いません」という天の声により、彼はどんなにヒロインに心を

尽くしてあげても、最初から最後まで何もなかった王子が選ばれてしまう理不尽を背負わされた……

けれどそんなシナリオは、異世界の乙女に会わずして都を出た時点で、もはや消え去ったも同然だろう。

「あたしも、前にここを歩き来した時より長かった感じがします。いろいろあったからですかね」

「ほとんど博打みたいな押し通った時もあったしなあ」

アロイス率いる隊商の一員であり、私と同年代のジゼルとリュカも、よく晴れた平原を感慨深そうに見つめている。

思い返せば一瞬なんて言葉で片付けるには、誰にとつても密度の濃い日々だった。

第一章 最初の一步が肝心^{かんじん}

このあたりの国々は夏が近付くほど空気が乾燥^{かんそく}し、気温もそこまで高くはならない。そよそよと涼しい風を受けながら、昼食に干し果物を食べた。

これは以前アロイスに採り方のコツを教えてもらった果実で、色も形もビワそっくりなのに、大きさが三倍ぐらいある。

自分の手で採ったそれを初めて味わった時、優しい甘さに「美味しいですわあ……！」とほつぺたを押さえ、みんなに笑われたのはいい思い出だ。

野菜は巨大化したら大味^{おおあじ}になりがちと聞くけれど、この実は味も香りもしつかりと詰まっている。「干すと甘みが増しますのね。採りたてとは別の美味しさがありますの」

「水気を抜かないと腐りやすいからな。最初に干すことを思いついた奴は、嬉しい誤算に驚いただろうぜ」

少量でも腹持ちのいいそれをお腹^{なか}に入れて、のんびりと出発。

背後から差す陽光が目の前に濃い影を伸ばし、世界を赤みがかった金色に染める頃、私達はロラン王国とウエルディエ皇国の国境まであと少しのところにいた。

私はいつもの馬車ではなく、隊列の一番前の馬車に乗っている。

アロイスもジゼルもリユカも一緒だ。積んだ木箱の上にクッションを置き、みんな思い思いの場所に座っている。

屋根の幌^{ぼろ}はアロイスの意向で外した。枠組みだけになった荷馬車はこちらの視界がひらけている代わりに、あちらからもよく見える。

私の白髪^{はくはつ}と白い肌^{はだ}は、視力のいい者であればとくに見えているはずだ。

「緊張しているか？」

「つ……ええ。少しだけ、ですけど」

変にコソコソしないほうがいいとアロイスが決めたのだから、私はその判断に従うだけ。なんだけど、国境の壁が近付くにつれて不安が頭をもたげてきた。

かつてロラン王国はウエルディエ皇国に従属する立場にありながら、一方的に袂^{たもと}を分かった。この一件は皇国にとって、今も許しがたい屈辱^{くつじやく}的な出来事なのではないか。

そこにロラン王国の聖女として有名な女が訪れたら、彼らはどんな感情を抱くだろう？

仮にそれが杞憂^{きゆう}に過ぎなかったとしても、心配ごとはもうひとつあった。

「アロイス様。わたくし、もしや引退の危機ですかしら？ わたくしが目指すところと、逆の意味で……」

遙か遠く^{はるか}の山が見えるほど晴れた視界。

この土地すべてを呑み込んでいた大瘴氣群^{だいしょうきぐん}が、私の登場と同じタイミングで綺麗に消滅したとなると。

外した帽子をぎゅつと抱きしめ、おそるおそる尋ねたら、アロイスは安心させるようにくしやりと頭を撫でてくれた。

「仮にあんたの引退を阻止しようとする輩がいても、その手合いに引き渡しはせんさ。約束する」

「お願いいたしますわ……！」

「ああ、任せとけ」

いつもながら、なんて頼もしい。

今まで何度となく思ったけれど、本来の物語の主人公。あなたはこうしてこの人じゃなくて、吹けば飛ぶ鯉節のごとき薄っぺらい王子を選んだの？

なんて言ったら、鯉節に失礼かしら。

高く聳える国境の壁は恐ろしさと同時に、ある種の美しさすら感じさせた。

巨大な門を中央に、見張り用の円塔が左右に立つ。上に見えるのは矢狭間か。

門の上部にある出っ張りは、通過しようとする敵の頭上から何かを落とすためのものだろう。

これは戦う用途で建てられた壁なのだと思うと、ゾクリと震えそうになった。

「どうした。寒いかな？」

「いえ。なんでもありませんの」

アロイスに声をかけられた瞬間、鳥肌が収まった。

この人の声、精神を安定させる魔力でも乗っているのかしら？

お礼を言う前に、すでに開いていた門扉の向こうから、大勢の人がぞろぞろ出てくるのが見えた。高いアーチの下から整然と歩み出る人々は、みな同じような服を着ている。

ウエルディエ皇国の兵士だ。

先頭に立ち、とびきり立派な装備を身につけている人は、五十歳ぐらいの男性。

いかつい顔立ちの中に不思議と愛嬌があり、黒髪の多い皇国人としては珍しく、髪色が明るい。

白髪交じりの小麦色の髪はきつめのウェーブが入っていて、後ろでひとつに結んでいるようだ。

彼らは私を警戒しているのか、それとも急に消えた瘴気群について話を聞きたいのか……

「げっ」

「アロイス様？」

「いや。なんでもない」

嫌そうな声といい歪んだ表情といい、なんでもないという様子ではない。

やがて兵士達が動きを止め、先頭の男性だけがこちらに近付いてきた。

あちらはアロイスとは逆に、機嫌のよさそうな満面の笑みを浮かべている。

アロイスの反応からして知り合いみたいだけれど、どういう人だろう。

その男性は片手を大きくブンブン振りながらズカズカと歩いてきて、荷馬車の側板にドンと片腕をかけ――

「ひっさしぶりだなあ坊主、息災だったか！」

黒茶色の瞳を弓のように細め、ヒゲに囲まれた口元にニンマリと笑みを乗せた。

……坊主？

「親父殿お……なんであんたがここに？ 聞いてねえぞ」

アロイスがものすごく低い声でうなる。

今、『親父』って言った？

勢いよく見上げると、アロイスは頭痛をこらえるように目を閉じ、片手を額に当てていた。

「え……えええ!? お、お父様ですの!？」

仰天する私に、小麦色の髪こがねの男性はニツコリと笑いかけてくれた。

その笑顔は実に愉快ゆかいそうで、アロイスとの対比が凄まじい。

「はっはっは、お父様だとも！ いやあどうした坊主、こんなべつぴんさんを横に乗つけて。早く紹介せんか！」

「勘弁かんべんしやがれ、親父……」

このやり取り、この反応、間違いない！

前世で読んだ小説に外見の描写はなく、漫画版でチラッとビジュアルが出ていた、グレゴリー・オベール本人だ……！

孤児だったアロイスを拾い、育てた人物。

アロイスから『親父殿』と呼ばれ慕たわれている、大商隊の頭領。

そう、商人だ。なのにどうして、ウエルディエ皇国の兵士の服を？

それもあちらで待機している兵士達より、明らかに格上とわかるものだ。

生地に施ほどこされた刺繍ししゅう 服の上に装着している軽防具、腰に帯びた剣——それらは意匠いしょうが豪華なだけでなく、グレゴリーという人物に馴染なじんで見える。

服装のイメージが全然違っていて、すぐにはわからなかった。

しかしアロイスだけでなくジゼル達でさえ、この人の装いに驚いている様子はない。

「わっはっは、よろしくなお嬢さん！ ここじゃなんだから、挨拶は中でしょうぜ。とつとと入れや！」

「あんたな、自分の家かよ」

アロイスのぼやきなど意に介さず、グレゴリーは「ガハハ」と豪快に笑い、兵士達に向けて腕を振った。

彼らは門の中に戻るのかと思いきや、速やかに左右へと分かれ、アロイスの隊商を囲む位置に移動する。

……本当にこれ、どうなっているの？

本来の物語の筋書きであれば、主人公は私によって濡れ衣ぬれぎぬを着せられ、ロラン王国の王宮から追いやられてしまう。

そんな主人公を拾ったアロイスは、彼女こそが本物の聖女ではないかと察しつつ、隊商の仲間とともにさまざまな国を巡ることになるのだけれど——その『さまざまな国』の中に、ウエルディエ皇国だけは含まれていない。

『俺の自慢の故郷だ。いつかあんたにも見せてやれたらいいが』

作中のアロイスは懐かしそうに語りつつも、とうとう足を運ぶ機会は訪れなかった。

彼がグレゴリーと再会するシーンも、舞台はウエルディエ皇国ではない別の国。

グレゴリーはただ、大商隊の頭領である『親父殿』として描かれ、それ以外の背景を匂わせたことはなかった。

もしやキラキラ王子の本性があんな軽薄男だったように、何か隠された設定でもあったのだろうか？

ともかく、先導するグレゴリーに周りの兵が続く以上、アロイスの隊商もそれに合わせて進むしかない。

何台もの馬車の列は大勢の兵に守られながら、ひらかれた門の中をゆつくりと抜けてゆく。

それにしても荷台から見上げた天井の高さと、この通路の長さはどうだろうか。

「これは一枚の壁ではなく、長城でしたのね」

「皇国の国境はだいたいこんな感じですよ」

「つつても、ここはとびぎり頑丈っすけど」

声をひそめて呟くと、すぐにジゼルとリユカが小声で返してくれた。

「……わたくし、偏った知識を刷り込まれて育った自覚がありますけれど、ウエルディエ皇国の規模にはいちいち驚かされますわ」

私の驚きはすぐに更新されることになった。

堅牢な壁の内側に入ると、そこには町があったのだ。

てつきりこちら側にも平原が広がっていると聞きや、しっかりとした石造りの道と建物が続いている。

「ここはモニークの町だ。もともとここに町はなかったんだが、国境警備兵との商売目当てで集まった商人が、自分達の居心地のいい環境を整えているうちに町になったそうさ」

「まあ。なんだかとても、アロイス様のお国らしい謂れですね」

天を暗く淀ませるほどの大瘴気群がすぐそこにあったのに、それでも町を作って住むという胆力がすごい。

「おまけに、ここを通ってロラン王国を目指す方々が少なからずいらっしゃる。それもあってこのように栄えたということですかしら？」

「ああ。でもそれだけじゃない。瘴気で変異する生物がいるのは知っているだろう？」

「ええ、存じておりますわ」

「ここでそいつらを仕入れて、無毒化して売るのが。ここらへんでは浄化の魔石をそういう用途で消費することが多い。神殿には眉をひそめられているんだが、だいたいは見逃されている」

「神殿……」

我ながら硬い声が出た。

その変化を鋭く察したのか、アロイスはすぐに「違うぞ」と付け加えた。

「この神殿は、あんたの知っている奴らとは別物だと思ってくれよ。俺は別にそいつらに肩入れをしているわけじゃないからな」

「え、ええ。存じておりますわ。わたくしのこれはただの条件反射ですから、お氣になさらないでくださいまし。この国に慣れましたら、きっと少なくなると思いますの」

同じ女神を崇める神殿といえど、国が変われば完全に別の組織。

わかっていても、植えつけられた不信感による拒否反応は簡単には止められない。

だから言葉通り、これはもう慣れるしか解決策はないのだった。

そんな私を見て、アロイスは片腕を持ち上げかけてやめた。もしかこの大注目の中で、頭ポンポンをしてくれるつもりだったのだろうか。

だとしたら思い留まってくれてよかった。道行く町の人々は誰もかれも、私の姿に注目している。褐色の肌と、黒っぽい髪の人々の中、私だけが白い。

強い好奇の視線を四方八方から感じながら、隊商はとても広い通りを、ひときわ目立つ建物に向かって進んでゆく。

「アロイス様、あの建物は？」

「ゴートイエ総督の住まいだ。モニークの国境警備と治安維持の最高責任者をしている」

「……ゴートイエ総督とおっしゃる方は、アロイス様やグレゴリー様のお得意様ですの？」

「んー。まあ、そんなもんだな
怪しい。」

グレゴリーだけでなく、アロイスの背景まで気になってきた。

案の定、隊商の列は総督邸の門前で停まった。

アロイス、ジゼル、リュカはステップの用意を待たず、側板に手をかけてひよいと飛び降りて
いる。

私は先に降りたアロイスに抱えて下ろしてもらった。だって彼らの真似なんてしたら、私の足な
んてぼつきり逝ってしまうもの。

「ふむう？ ほほう？ うんうん」

何やらグレゴリーがヒゲを撫でつつニヤニヤしている。

アロイスが囁みつつこうとした直後、総督邸の中から家人らしき人々がぱらぱらと出てきた。

「皆様どうぞ、お通りくださいませ。お部屋の準備は調えてございます」

「うむ、邪魔をするぞ」

「感謝する」

彼らのうやうやしい態度に、グレゴリーもアロイスも当たり前のような顔で応えた。

……あのねアロイス？ 私がいくら世間知らずでも、一介の商人がこんなところにタダで泊めて
もらえるわけがないんだって、そのぐらいはわかるのよ？

少々問い詰めたくなったけれど、人前だから我慢するしかない。

おまけに私ひとりだけ、豪華な個室があてがわれた。

「え。ジゼルも別のお部屋ですの？」

「すみませんセレ様。あたしも一緒のお部屋がいいですけど、格式の高い家つてのはどうしてもこ

ういうのがあるんで……」

「俺も面倒だが、こればかりは仕方がない。湯で埃を落としたらメシの時に会おう」

アロイスの言葉に少しホッとした。食事時に会えるのなら、この場でみんなとお別れになる心配はなさそうだ。

ただ――

「ご滞在の間は快くお過ごしいただけますよう、誠心誠意お仕えいたします」

「なんなりとお命じくださいませ」

綺麗な服の女性達から挨拶を受けた時は、その特別扱いにちょっと嫌な感じがした。

でもこれは私の心が荒んでるせいと、悪い方向に深読みしているだけかもしれない。

長旅の直後だからとお風呂を勧められ、断る理由もないので、大人しく案内してもらった。

「はああ……さっぱりしましたわ！」

久しぶりのお風呂は、とつても気持ちがよかった。

旅の途中では、水かお湯で濡らした布で身体を拭いて済ませることがほとんど。大きな木桶にお湯を張るお風呂は、水も燃料もかなり消費するし、滅多にない贅沢だったのだ。

「これほど心置きなくお湯に浸かることができたのは、もしかしたら生まれて初めてかもしれないわね……」

王宮や神殿では入浴時間すらきっちり決められていて、長湯なんてできなかったのである。

ほこほこ幸せな気持ちでお風呂から上がると、侍女のひとりが微笑みながら薄い羽織り物を着せてくれた。

椅子に腰を落着けたらと何人かが扇子で扇いでくれて、何も言わなくても飲み物が用意される氷室で冷やしていたのだろうか。ほんのり柑橘系の果物の香りがするそれは、ほどよく冷たくて甘みがある。

身体の熱をざっと冷まして汗を飛ばすと、彼女達は服を着せつけてくれた。

たとえこの国の衣装に詳しくなくとも、生地や刺繍の上質さは一目瞭然。

靴も外履き用のブーツではなく、いかにも繊細な布の靴だ。

さらに彼女達は私の髪を手早くハーフアップにして、後ろの部分にしゃらしゃらとした髪飾りを挿してくれた。

……なんだかお姫様っぽくない？

重ね着した上着の下から覗く、たつぷりとした薄い生地のレース。布を余るほど使えるというのは、高貴な人間の衣類の特徴だ。

アロイスや隊商の人達の服装と同様、ヨーロッパと古代中国の漢服をアレンジしたような衣装。ただ、建物に関してはあまり中華っぽさがない。

「ひとつお尋ねしてもよろしいかしら」

「はい、なんなりと」

「モニークの町並みは、どっしりとした石や煉瓦造りの建物ばかりでしたわ。木造のものはありま

さんの？」

「さようでございますね。木造の建物は、瘴気に適しておりますめから」

「あ。そうでしたわね。愚かなことを訊いてしまいましたわ」

生物や植物は瘴気の影響を受けやすい。だから木材の使用を避けるのは当然の対策だった。

納得していたら、「こちらへどうぞ」と促された。

そういえばアロイスが、メシの時に会おうって言ってたっけ。

彼女らのあとについて廊下を進み、案内されたのは広い会議室のような部屋。

てっきり食堂のような場所で隊商の皆が賑やかにしていると思像していたのに、そうではなかった。

奥の壁にはウエルディエ王国の紋章のタペストリーがあり、その手前に長方形のテーブルが置かれている。

天板は重厚感と艶のある黒茶色。それを支える四脚の一部に透かし彫りのある、見るからに上等なテーブルだった。

そこに、立派な衣装を身に纏った四名の男性の姿がある。

上座には三十代後半ぐらいの男性。おそろく地毛だと思っけれど、くせのない黒髪に金茶色のメッシュが入り、気品に溢れながらもどこか虎を彷彿とさせる人だった。

その人が座る椅子の傍らには、学者のような風情の老人が姿勢よく立っている。

さらに、上座の男性から見て右側の席にはグレゴリーが。

そして左側の席にいるのは――

「アロイス様？」

「……ああ」

私と同じように、彼も長旅の汚れを落としたのだろう。髪にも肌にも埃ひとつなく、豪華な衣装がとても馴染んでいる。

生地や質や量だけでなく、施された刺繍もまた、衣装のグレードの高さを物語っていた。

姿勢よく堂々として、頭領だから貴人と同席するのに慣れているとか、その程度のレベルではない。

――もしもし、前世のお母様。ちよつとそこに座って、状況を説明してくれない？

どことなく不機嫌そうというか、不本意そうにしているところは、いつものアロイスらしくてホツとするけれど。

「ささ、お嬢さん。遠慮しないでそこに座れ」

グレゴリーが笑顔で手招きする。

上座の男性も温和な笑みを浮かべつつ、片手で「どうぞ」と促す仕草をした。

えく……もしかして私、この人の正面に座るの？ ヤダー。

心の中にミュリエルを召喚し、ヤダーヤダーと大合唱。働き者の夜行鳥は、今頃この空を飛んでいるのだろうか。

ところで、私をここまで案内してくれた侍女達は全員、いつの間にか音もなく退室している。

この椅子は自力で引いていいのだろうか？

と思っていたら、私が座ろうとしたタイミングに合わせてアロイスが席を立ち、背もたれを持って位置を調整してくれた。

「ありがとうございます」

「いや……」

笑いかけても、彼の表情は晴れない。

アロイスが自席に戻ったと同時に、学者風の老人が全員にお茶を淹れてくれた。この人は立ったままで、自分はお茶を飲まないみたいだ。

座らせてあげたいと思って、相手にとっては余計なお世話の可能性もある。初対面ではありがた迷惑の判断がつかないし、下手な親切心を発揮しないほうがいい。

テーブルについた全員が湯呑みを手にし、軽く乾杯のような仕草をして口をつける。

ひと口飲んでみると、いつも飲んでいる穀物茶とそっくりな味がした。

「さて、夕餉の時刻にはまだ間がある。その前に挨拶をさせていただく」

コトリと湯呑みを置き、上座の男性が口をひらいた。

私を見据える瞳の色は、アロイスのそれとよく似た紫色。

「我が名はマティス・ウェルディエ。この国の皇帝である。非公式の訪問ゆえ、作法などは気にせず、ただの知人として話してくればよい」

無理です。

と、反射的に叫びたくなった。

そういう情報はもつと小出しにしてください。せめて偽名を名乗ってください。身分を隠してください……!!

入国初日に、いきなり皇帝陛下ご本人の登場。しかも商人であるはずのグレゴリーとアロイスが、ごく普通の顔で同席しているのはどういうことか。

「そしてこの者はゴージェイエ。この総督の任を与えている」

紹介を受け、傍らに立つ老人が会釈をした。

どうやら私達はみんな、総督様にお茶を淹れさせていたらしい。

——もしもし、前世のお母様？ 至急この場に転生し、きっちり説明していただけないかしら!! アロイスは王族でも騎士でもない身分だったからこそ、『このレーベルでは不可』の定めに抗えなかったはずだ。

そして母の書いた設定では、アロイス・オベールの項目にはつきり『元孤児の商人』とあり、ストーリーの中の回想で彼自身もそう語っていたのである。

私がじつと無反応で見つめていると、マティス陛下はややバツが悪そうな顔をした。

けれどすぐに何事もなかったような顔を作り、彼は私が想像もしなかった『背景』を語り始めた。

「かつて罗兰王国は、ウェルディエ皇国の属国であった。ところが三十年ほど前のある日、当時の罗兰王が従属関係の解消を一方的に宣言し、我が国と争うこととなった。そのくだりはアロイスから聞いていよう」

「ええ。伺っておりますわ」

正しくは、アロイスと隊商の一員であるヒューゴから聞いたのだ。

怒った当時のウエルディエ皇帝がロラン王国へ兵を送り込んだものの、進軍中にとてつもない瘴気が発生したため失敗。

ロラン王国側は「自分達には女神の守りがある」と声高に言い、甚大な被害を出したウエルディエ皇国側は、それを否定することができなかった。

「ロラン王が突如そのような行動を取った理由だが、託宣があつたらしい。『いずれこの国に女神の化身が生まれ落ちる』とな」

「託宣……」

「だが、それを告げた者の正体は詐欺師だつた」

「さ、詐欺師ですよ？」

目を丸くする私に、マティス陛下は苦笑して首を横に振った。

「真実、金儲けが目当ての詐欺師だつたのだよ。その男がロラン王国の大神殿に身を寄せる前は、別の国で身分を詐称し、貴族の娘に偽りの婚姻をちらつかせて金品を騙し取っていたと調べがついている」

……やだわー。私も長いこと偽物聖女をやってたけど、さすがにそんなのと同類なんて思われたくないわー。

当時のロラン王もロラン王だ、うさんくさい男の託宣をコロリと信じ込むなんて。

元婚約者のオーギュスト王子に流れる血は、どうやら脈々と受け継がれてきたおバカさんの血

だつたらしい。

「当時の皇帝、すなわち我が父は偽の託宣であることを知っていたがために、当然ながら奴らの主張を鼻で嗤った。だがあいにく、父は息子の私から見ても愚か者でな。ロラン王も心得違いをしていたが、あの男はそれ以上であつたよ」

先代の皇帝陛下は「女神など存在せぬ」と言い放ち、ロラン王国を攻めさせ、そして失敗した。

何人もの皇族が責任を取られ斬首刑となり、皇帝への不満が噴出。

ゆえに休戦と同時に、退位を決めたという。

「女神を軽んじる己の言動が、本当に女神の怒りを買ったのではないか。その恐怖に精神をすり減らしたことも決め手になったようだな。私は十八という若さで奴の不始末を押しつけられるはめになり、実に面倒であつた。ひとり息子ゆえ、くだらぬ争いが起こらなかったことだけが幸いと言えよう」

「ま、まあ……お察しいたしますわ」

そんな怖い話、お願いですからよそでやってください。

切実な心の声は、残念ながら相手の耳には届かない。

「そこにいるグレゴリーは、私の叔父上なのだ。父の腹違いの弟でな。平民の娘から生まれ、継承権はとうの昔に放棄している」

ですから！ 陛下！ そういう大暴露を！

もうちょっと、こっちの心臓に配慮した言い方をしてください!!

暴露前にせめてワンクッション入れてーっ!!

「そしてアロイスだが、我が従兄弟殿だ」

あ、マティス陛下の息子や弟ではなかったのね。それならまだなんとか——
いえ、まだなんとかって何。いけない、感覚が麻痺しているわ。

当のアロイスは、あからさまにイライラした顔でお茶をすすっていた。

そんな彼を放置して、マティス陛下はさくさくと心臓に悪い話を続ける。

先代皇帝には腹違いの弟が二人いた。

そのひとりであるグレゴリーは欲深い兄に嫌気が差し、さっさと継承権を放棄して商人になる道を選んだ。

もうひとりの弟は病弱だったが、やはり兄を嫌って継承権を放棄、皇宮を出た。その後、病を得て他界したものの、囲っていた踊り子との間に子を成していた。

それがアロイスだ。

「件の踊り子は皇族の妻としての権利を主張し、父の側近によって斬り捨てられている。赤子を始末せず孤児院に放り込んだのは、駒として確保しておくのが目的だったようで、そこをグレゴリーが独断で引き取ったのだ。私が一連のことを知らされたのは即位後、さまざま膿を吐き出す過程のことだった」

——つまり。

アロイスは皇族の血を引きながら生まれつき継承権がなく、商人になる道を歩んだ人物、という

ことだったのだ。

衝撃の連続で、感情が追いつかない。

道理で、彼が主人公をこの国に連れてこなかったわけだ。

改めて考えてみたら、自慢の故郷だけを案内してあげないなんて不自然なことだったのに。

いくら継承権がなくとも、愛情はあっても、彼にとっては長居しないほうがいい故郷なのだ。

きつと、グレゴリーにとっても。

「して、そなたの今後の身の振り方だが。神殿に入ることは望まぬそうだな?」

またもや急な話題転換に、心持ち背筋を伸ばした。

「お言葉の通りにございますわ」

「ならば、そなたを皇宮に迎え入れる準備がある。望みの地位、身分があるならば遠慮なく申ししてみよ」

柔和な笑顔の奥、油断ならない光を湛えた瞳が私を刺す。

……あら。やっぱりそう来ますか。

お姫様っぽい服を着せられた時点で、そんな気はしていた。

自分だけ豪華な個室を与えられ、侍女を何人もつけてもらい、至れり尽くせりの環境。

彼らは、私を試している。

飄々とした態度を崩さず、語り役をマティス陛下に譲っているグレゴリーもそう。

ただ、少なくともアロイスだけは、私がどういう性格で何を望むのか知っている。

彼だけは、この試験を快く思っていないのだ。

——私はアロイスに、手間のかからない頼り甲斐のある女だと思ってほしい。

だからじつと見据えてくるマティス陛下に、長年の聖女生活で磨き上げた最高の微笑を向けた。
「謹んで、遠慮させていただきたく存じます」

神殿が嫌なら皇宮に迎えてあげてもいいよ？

お断りです。

うますぎる話は裏を疑え。それが前世と今世の両方を合わせた、今の私の心得だ。

マティス陛下はどこか意外そうな顔で私を見返している。

もしかして、私がありがたがると本気で思っていたのだろうか。

「よいのか？ 今ならば、なんなりと望みを通すことができるぞ」

「今ならば特典としてあれもお付けいたします、これが最後の機会です。それもまた安易に飛びついてはならぬ危険な宣伝文句であると、わたくし、よく存じておりますよ……！」

そういうのは大抵、もらった以上に何かを支払うはめになるのよ……！
笑顔増量で告げたら、何故か陛下とグレゴリーはアロイスに目をやった。

「俺は教えてねえ」

何やら否定しているけれど、どうしたのかしら。

「せっかくのご厚意を無下にしてしまい、まことに申し訳ございません。ただわたくしの望みは、皇宮という場所で叶えられるものではありません。どうか、そのことをご理解くださいまし」

嫌なものは嫌だと最初にしっかりと一言っておかないと、結局は相手のいいようにされてしまう。

私を使い倒したロラン王国の人々とマティス陛下が違うかどうかなんて、そんな判断ができるほど私はこの人に詳しくないのだから。

「聖女であることを捨て、平民として生きる意味がわかつているのか？ そなたに傳く者はいなくなり、そのように美しい装いなどもしていられなくなるぞ」

「まあ。ほほほほ」

いけない、つい『悪役聖女の高笑い』を発動してしまった。

マティス陛下やグレゴリーだけでなくアロイスまでぎょっとしているけれど、仕方がない。

さすがに今のはカチンときたのだから。

「傳く者、ですって？ ええ、確かにありましたわ。腰だけは低くとも、お顔には『我が儘をおっしゃらずこちらの命令通りになさってくださいませ』と書いている侍女ですとか。何やらよくないことが起こると、すぐに『聖女様の祈りが足りないせいだ』と騒ぎ出す民ですとか」

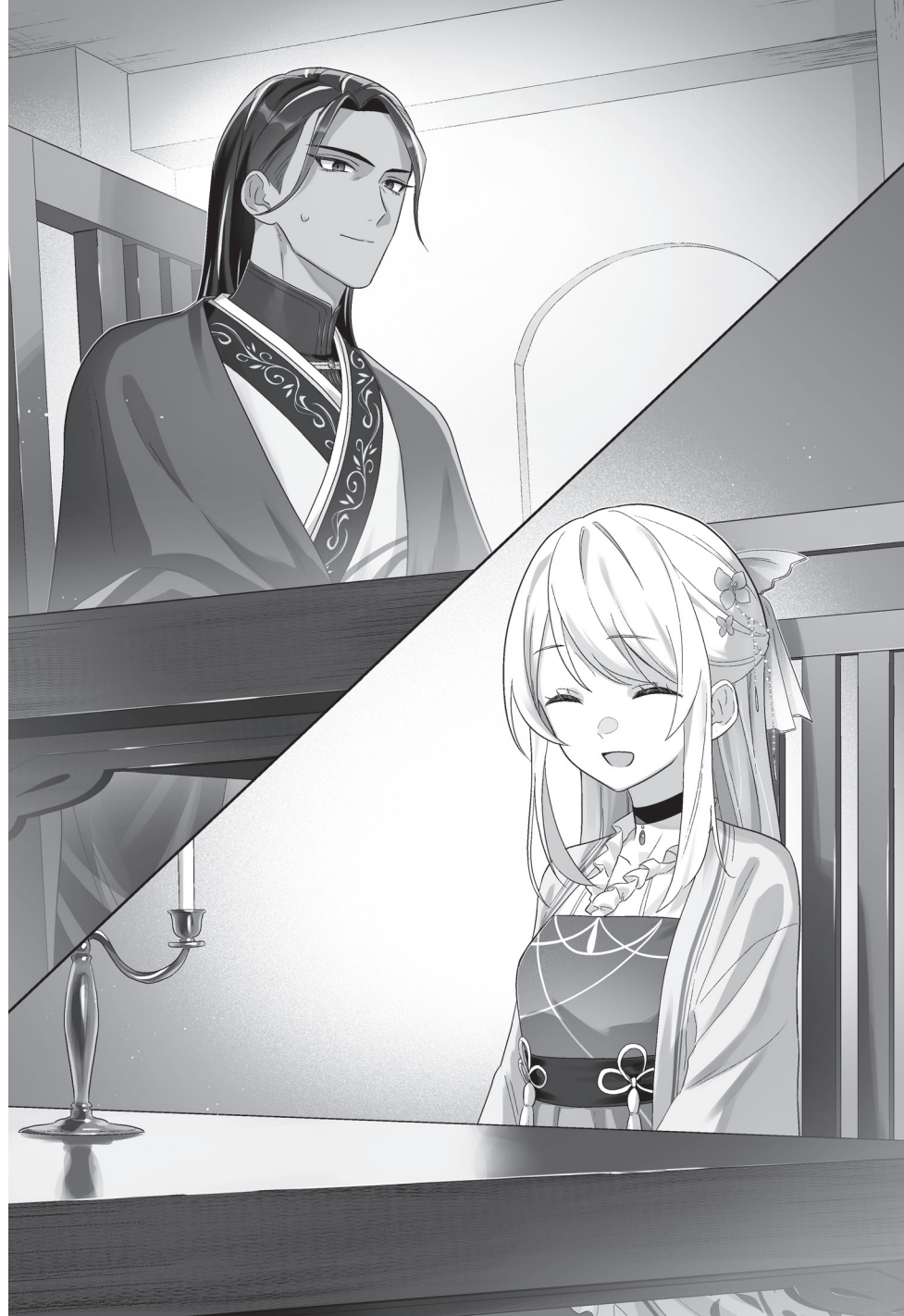
「あゝ、落ち着け？」

アロイスが口を挟むも、一度ブツツンした私の口は止まらない。

「あとは美しい装い、でしたかしら？ ええ、装いだけは美しく飾り立てられておりましたわね。なんと申しまして、大切なお人形の衣装なのですよ」

「人形の衣装……」

「ええ陛下。聖女というお人形に着せるための衣装……いいえ、役柄に相応しい舞台衣装ですわ



ね。ですから、あの国にわたくしの所持品など何ひとつありませんでしたのよ。休憩時間？ 気分転換？ なんですのそれ、何か美味しいものですか？ 日々の疲れなど、疲れていないふりで乗り切るものですのよほほほほほ」

マティス陛下とグレゴリーが引き気味になり、アロイスが額を手で押さえている。

私、ちよっぴり言いすぎているかも？

でもいい。後悔はしていない。

「遠慮なくなんでもとおっしゃりながら、実際はどのような望みを口にしても許されるわけではありませんかでしょう。ほとんどの方は願いを常識的な範囲に収めるでしょうし、陛下もわたくしが控えめな願いに留めることを、半ば当然と思っていられしやる。世の中とはそういうものであるとわたくし、重々承知しておりますよ」

マティス陛下は気まずそうな顔をした。図星だったのだ。

慎重しく、清廉で、決して多くを望まない。それでいて一本心の通った娘。

この人がそういう人間を好ましく感じるタイプだとしたら、仮に私が皇宮に行った場合、形を変えて再び我慢の日々が始まるということだ。

「仮にわたくしが皇宮でお世話になりますと、『皇宮に入った聖女』としてのふるまいを求められることになりましょう。たとえば陛下がわたくしにそれを求めずとも、周りの方々が放っておいてはくだらない。そのような不自由極まりない日々など、まっつつぴら、ごめんですのよ」

私は、あれが欲しいこれをやりたいと、我欲全開で言える日々が欲しいんだから……!!

鉄壁の笑顔を保ちつつ、心の中では鼻息荒く胸を張っていると、アロイスの静かな声が割って入った。

「これで、俺がお伝えしたことはご理解いただけたでしょう、陛下」

静かであり、少し怒っていいような声だった。

「そもそも俺は、お会いした時に改めて詳細を説明するともお伝えしたはず。なのに到着するなり、俺ではなく本人に直撃などするからこうなるのです」

「う……む……」

「いや坊主、あまり陛下に言ってやるな」

「親父殿もだぞ。あんたも止めずに様子見をしたかったんだろ？」

「まあな。すまん、その通りだ」

グレゴリーは苦笑いしつつ、陛下ほどには悪びれていない。

そんな養父を軽く睨み、アロイスは私に目を向けた。

「陛下や親父殿とは、ミュリエルを介して連絡を取り合っていた。夜行鳥の運ぶ手紙の大きさ、おまえも何度となく見ただろう」

「ええ、もちろんですわ」

私が手の平を広げたぐらいの紙、もしくは表面を加工して文字を書けるようにした布。

それを巻物にし、鳥専用の小さな鞆や布袋の中に入れて運ばせる。

「おまえの事情やこれまでのことをすべて書き切れる大きさじゃない。それでも暗号を使い、ロラ

ン王国の聖女が亡命希望であること、理由は王宮や大神殿でろくな扱いをされなかったためであり、普通の暮らしを望んでいるようだと書いた。その他の詳細は会ってから説明するとして、親父殿に送ったんだが」

「完璧ですわ!? 大事なことがすべて入っておりますわよ!」

「だろう? なんてこんな状況になってんだかな」

やはりこの展開は、アロイスにとつても不服だったみたいだ。

手紙の内容をマティス陛下に伝えたであろうグレゴリーも、さすがにバツが悪そうに頭を掻いている。

「たとえ聖女とやらが口ではそう望んだとしても、実際どこまで真剣かどうかからん——陛下がそうおっしゃってな。悪いが、俺もそれには同感だった」

「はん。それで、お姫様の待遇を思い出させたら心変わりをするかもしれない?」

「そうだ」

グレゴリーはハッキリと頷いた。

「聖女セレスティーヌは、蝶よ花よと大切に育てられた箱入りの聖女様。おまえだってそう思ってたろう?」

「そうだけだよ。それは——」

「加えて、ロラン王国に出現した新たな聖女が存在だ。あの国の王は、より力が強いとされる新しいほうの聖女を王子の妃に迎えようとするだろう。つまり国を出たくなった最大の理由ってのは、

結局のところそれなんじゃねえかってな」

アロイスはグツと詰まる。ひょっとしたら彼も、そんな風に誤解していたことがあるのかもしれない。

「世間知らずのお姫様が結婚の約束を反故にされ、不満を訴えている。そんなお姫様が普通の暮らしをしたいと言っても、悪いが説得力はない。だから日を置かずにこの場を設け、心の準備もさせないようにしたのさ。そのほうが本音を引き出しやすいと思ってるな」

「もしや、アロイス様がずっと静かでいらしたのは……」

「あんたに喋らせるまでは黙ってるって命じられてたんだよ」

「まあ……」

私はこれでもかと呆れ顔を作ってた。

権力者って、どうしてそんなややこしいことを考えて、ややこしい真似をするのだろうか。

アロイスの報告通りに受け止めたらいじやないの？

素直に彼の話を聞いておけばよかったじゃないの？

「このような面倒くさい方が大勢いらっしやるかと思うと、ますます皇宮になど行きたくなくなりますわね」

「同感だぜ」

「いやいや、ははは。すまん！」

「返す言葉もない」

……まあ。少なくともロラン王国のガスパール王は、下の者がこんなことを言ったらすぐに「この者を斬首にせよ！」などと叫び出すタイプなので、マティス陛下のほうが遥かに人間ができていそうだと思う。

平民育ちであるアロイスとグレゴリーのことも色眼鏡では見ずに、身内として接しているみたいだし。

ただ、初めましての一步目を間違えたのは大減点だ。

「聖女という存在に、あなたと親父殿が懷疑的だったのはわかる。俺もかつてはそうだった。世間知らずのか弱い娘を放置して野垂れ死にでもさせたら寝覚めが悪いし、どこぞの貴族が道具として囲い込んでも困るとな」

……野垂れ死に、しそよね私の見た目って。

自分では意外としぶとく生き残りそうな気がしてはいるんだけど。

「神殿に入る気がないのなら皇宮で管理し、なんなら『ウェルディエ皇国の聖女』と宣伝して利用すればいい。当然、あなた方はそうお考えになると思っていたから、まずは話をお聞きいただきたいと、そうお伝えしていたんですよ」

「あゝ、すまぬ。そうチクチクと言うな」

ますますバツの悪そうな顔で、マティス陛下は頬を掻いた。

その仕草が妙にグレゴリーと似通って見え、不覚にも少しホッコリしてしまった。

「悪い悪い、俺も陛下をお止めしなかったんだからそこまでしてやってくれ。まあこっちは早合

点だったな」と反省してんだよ。聖女殿——いや、セレスティヌ殿。せっかく我が国に来てくださったというのに、のっけから非礼を働いてすまん。この通りだ」

グレゴリーが頭を下げ、陛下も「すまぬ」と頷いた。

口先だけではなく、二人とも本気で反省していそうな空気が漂っている。

「わたくしも、随分と無礼な口をきいてしまいましたわ。お許しくださいませ」

ということ、こちらも矛を引つ込めよう。

なんといっても、立場の弱さはこっちのほうが圧倒的に上なのだから。

「んじゃ、話を聞かせてもらえるか？ 俺らが思っているのと事情がだいぶ違うみたいだが」

と、グレゴリー。

「それを最初に訊いてくれよ……！」

と、アロイス。本当よね。

まず、最初に、それを訊いてよ？

「つ……疲れましたわ……」

部屋に戻るなり、寝台へ直行してダイブした。

ほどよいいい香りがするのは、香が焚きしめられているからだろうか。

心配する侍女達になんでもないと答えつつ、早めに退室してもらい、適度な弾力に溜め息をつきながら仰向けになる。

あのあと夕食が運ばれてきて、食事をしながらこれまでの経緯を語った。

といっても、ほとんど全部アロイスが話してくれたんだけど。

「それにしても、わたくしの作る浄化の魔石、売り物にされていましたのね……？」

ロラン王国の神官が富裕層相手に高額で売りつけていたと聞いた時は、目が点になってしまったわ。

さらに私の両足に呪具が埋め込まれていた件に話が及ぶと、マティス陛下とグレゴリーは不愉快そうに顔をしかめ、彼らの中にほんの少し残っていた『お姫様』に対する侮りは完全に消えた。

そんなものを使われていた時点でお姫様扱いじゃないとわかるし、足を切って取り出すなんて、

男の人にとっても怖いことだものね。

『話は理解した。我らは早合点をしていたようだな』

『坊主を信用してなかったわけじゃないが、若い奴つてのは妖艶な悪女の色香にころっと落ちることがないとも言えんからなあ。蓋を開けたら細っこくて可愛いお嬢さんだったが。いやあ、まさか

おまえが——』

『言うな。それ以上言うなよ』

呪具の話をしていたのに、どうして色香の話題になったのだろう。確かに私にそんなものは微塵もありませんが、それが何か？

マティス陛下もなんだかニヤニヤ笑っていた。ただしこちらは私の視線に気付くなり、咳払いをして真顔に戻るところがグレゴリーとは違う。

『それはそうと、不可解なことがある。あの瘴気群が消えたのは何故だ？』
マティス陛下の問いかけに、ずっと気配を消していたゴートイエ総督が、初めてぴくりと反応した。

この地の安寧^{あんねい}を任ぜられている身としては、一番気になるところだろう。

『何故と問われましても、わたくしにも何がなんだか……』

『着いてみたら、何もなかったのです。彼女が何かをしている様子はなかったので、俺達にもわからないのですよ』

『あれほどのものが、自然に消えたと……？』

『あまりにも都合がよすぎると思われるのは無理ありませんが、事実です』

アロイスがきっぱり言い切ってくれたのに、マティス陛下もグレゴリーも納得がいつていない様子だった。

ちょうどその頃、私が夕食を食べ終えた。私の料理は男性陣よりも量が少なめで、彼らも食べる速度を落としてくれていたのに、それでも完食するのに一番時間がかかった。

とても豪華で美味しかったはずなのに、味をほとんど思い出せない。料理人に失礼だから、ちゃんと覚えていたいと思うのに。

その後、私だけが先に退席させてもらうことになった。

彼らは今も話を続けているはずで、果たしてどういう結論に至るのか。

「ふう……。このままでは眠れませんか」

瞼^{まなこ}を閉じるといい香りがする。とても心地いいのに、どうにも落ち着かない。

仲間達と賑やかに焚火^{たきび}を囲む、あの空気にすっかり慣れたからだろうか。

あと、ここには……人をダメにするあの箱もない。

自分の身体がすっぽりと嵌^はまる、素晴らしいフィット感。

あれを賓客^{ひんきやく}用の部屋に置いてもらえるはずもなく、滞在日数によってはとてもつらいことになりそう。

「明日に疲れを残したら、皆様に心配をかけてしまいますわね。少しでも眠りやすくなるよう、何か楽しい想像でもしてみましよう」

なのでさっそく、ロラン王国の偉大なる国王——ガスパール・アダンの髪をさまざまな色で塗^ぬってみた。

蛍光色^{けいこうしき}のヘアカラーって、本当に暗い中でも光って見えるのよね。

前世の私自身が染めていたのではなく、動画か何かで見たのだと思う。

ピンクと紫とー、あと黄色は外せないわー。ほかには何色がいいかしらー？

そういえば、髪の上にペイントをしているのも見たことがあった。

染めるのではなく、文字通り髪に模様を塗っていたのだ。

ワンちゃん^{ワンちゃん}の動画で、生まれつき毛並みの色がハートマークになっているのもあったっけ？ あ

れいいかも。

想像しているうちに、全身から余計な力が抜けてきたのか、だんだん眠くなってきた。

くふくふ笑いながら、女神様お願いしまあす！　なんて祈った直後ぐらいから、記憶が途切れている。

SIDE アロイス

「なんと。そのようなことが？」

「おいおい坊主、さすがにそりゃあ……」

「何度でも言うが、事実だ」

セレスティーナを先に部屋へ戻し、やっとこの件を話すことができた。

——オーギュスト王子の頭が、とんでもないことになっているらしい。

くるくる巻いた髪がこんもりと盛り上がり、寝具に詰め込む綿のごとき有様になっているそうだ。それはまさに、セレスティーナの口から吐き出された祈りの内容と一致している。

いや、祈りと言っていいのかあれば……完全に呪詛だろ。

ともかく、こんなことが偶然の一致で起こったまるか。

最初にこれを説明したところで親父殿も陛下も信じやなかったろうが、それまでに彼女が激怒しないかヒヤヒヤさせられたぞ。

「ブノワ大神官もこのところほとんど表に出ていないようですから、きっと王子と同じ状態になっ

た頭を隠しているのです。セレスティーナにはこのことを伝えておりませんので、彼女には自覚がありません」

ここにいるのは陛下、親父殿、ゴートイエ総督という肝の据わった人間だけだが、それでも全員、顔色が悪くなっている。

初っ端から俺の発言を封じたせいで、危うく恐ろしいことになるどころだったもんな。

「これからは安易にあのような『祈り』を口にしないと約束させていますが、怒りに任せて口走るかもしれません。ですので、ご自身のお言葉と態度には重々お気を付けください、陛下」

「う、うむ。承知した」

「親父殿、あんたもだぞ」

「お、おお……」

気がかりはまだある。セレスティーナの解毒魔法だ。

彼女は見るからに身体が弱そうなのに、これまで風邪らしい風邪を引いた覚えがないという。

そのため自分自身に何度もかけていた解毒魔法が、病の毒にまで効いていたのではないかと仮説を立てていた。

だが病に効果のある魔法など、やはりこの場の誰も聞いたことがなかった。

「アロイスの申す通り、作り物と思われていた彼女こそが本物、か……」

「もうひとりの聖女とやらは、今もたいした噂を聞きません。騒がれていたのは出現した直後ぐらいいです」

「その娘についてだが、どうもまだ聖女の力が目覚めとらんようだ。それだけじゃなく、ほかの魔法も一切使えんらしいぞ」

「ほかの魔法もかよ？」

「毎日訓練をさせているらしいんだが、これっぽっちもな。過去に現れた聖女の記録では、ここまですぐに覚醒が遅い上に、なんの魔法も使えんというのは例がない」

「……聖女の記録？」

その言い方に引っかかった。噂や報告、物語めいた言い伝えではなく、記録？

親父殿は肩をすくめ、代わりに口をひらいたのは陛下だ。

「ロラン王国だけではないのだ。世界中にある。我が国にもな」

「初耳なのですが」

「どこも秘しているからな。一部の国と一部の神殿にのみ、口伝や文書で伝わっている。聖女とは本来、ロラン王国のみに恩寵をもたらす存在ではないということだ。——あの娘こそが『本物』であるならば、その道を遮ることは女神への反逆に等しい」

「それほどですか？」

「それほどだ。女神はなんらかの意図をもって聖女を遣わすとされているゆえにな」

話がでくなってきたな……あいつ、聖女引退が目標とか言ってたけど、叶うのか？

「セレスティーヌは異世界から召喚されたわけではありません。召喚聖女こそが本物という話はどうなるのです？」

「此度の召喚を行ったのは大神殿の者であって、女神のご意思により招かれたとは限らぬ」
絶句した。

確かに、それはそうなんだが。

「過去に召喚された娘は、例外なく聖女だったのでは？」

「それについては諸説ある。が、私も詳しく話すのは難しい。そこで、今後の聖女セレスティーヌの身の振り方に関してだが、ひとまずそなたに一任する。構わぬな？」

「——願ってもないことです」

親父殿、そこで「ほほう」とか言ってんじゃねえ。気が散る。

「ただ、ありがたいはありますが、意図をお聞かせください。あなたは話運びが独特で心臓に悪いのですよ」

「うむ。セレスティーヌが望まぬのであれば、皇宮にも神殿にも属さずともよい。束縛はせぬが、あくまでも我が国に属する者として自由に過ごしていただく。そのためには、セレスティーヌに信頼されているであろうそなたが庇護者として適任と考えた」

ただし、と陛下は続けた。

「道中、大神殿に立ち寄れ。そこで聖女について尋ねるといい」



「……いけませんわね、わたくしの悪い癖くせですわ」

小鳥のさえずりに耳を傾かたむけながら、寝入る直前のことをちよっぴり後悔した。
ついつい、女神様に変なお願いをするのが癖くせになっている。

これはよくない。こんな妙なことはかり祈られても、女神様だって困るでしょうに。

ほんと女神様、すみません。

これ、個人的な気分転換みたいなものですから、あんまり真面目に受け取らないでくださいね？
「……などと言いつばかりしては、いざ本気で祈った時に無視されそうで怖いすわね。気を付けなくては」

では昨夜の『祈り』が本気ではなかったのかと問われたら、あの傲慢王ごうまんおうの頭がド派手なレインボーカラーになってしまえばいいと、かなり本気で願っている。

ひとり反省会をしながら時間を潰し、窓から差し込む光が明るさを増してきた頃、ようやく寝台を抜け出した。

「セレスティーン様、おはようござ……あら？」

「もうお目覚めでしたのね」

起こしに来た私がとうに活動を始めていたものだから、侍女さん達は目を丸くした。昨夜の様子

から、疲れ切った私がまだ寝入っていると思っていたみたいだ。

びっくりしようとも仕事の手を抜かない彼女達は、私の服を就寝用のものから日常着に着替えさせてくれた。

シヤラシヤラのお姫様衣装ではなく、いつも着ている隊商の服の予備である。

か、い、て、き……！

布がズルズルしていないから動きやすいし、身体に変な力が入らない。

「今日もいいお天気ですわね。とっても気持ちのいい朝ですわ」

マナーを気にせず伸びをしている私に、侍女さん達は眉をひそめるでもなく「本当に」と頷いた。

「これほどにお天気のよい日など、モニークでは初めて経験いたしますわ……」

「お空のあそこからこちらまで、ずっと薄汚うすよごれておりましたのに……」

「……そうでしたのね」

国境の長城からこちら側までは、滅多に瘴気が侵入してこないという話だった。

でも、空は事情が違う。

ずっと向こうまで太陽が遮られて暗く濁にごり、真昼あかでも灯りが必須だったという。

瘴気は風の影響をほぼ受けず、水にはとける性質があり、瘴気溜まりのある場所では河川の水や、横殴よこぐりの大雨に注意が必要になる。アロイス達から、何度もそんな話を聞いていた。

——ならもしかして、『雲』も？

だって雲は水滴や氷の粒つぶが浮かんでいるものだ。となると、『霧』きりもそうかもしれない。

雲を見下ろす高山に暮らしている人々や、霧の濃い場所で暮らしている人々には、空気中をモヤモヤ漂うそれが水分だとわかるだろうか？

隊商の人々に会えたら、ついでにこのことを訊いてみよう。

朝食は部屋でとるのかなと思っていたら、夕食時と同じ場所に案内された。

でも今朝は違う点がある。アロイスもグレゴリーも昨夜みたいな豪華な衣装ではなく、普段の気楽な装いになっていたのだ。

マティス陛下もよく見ると、貴族の若様がお忍びで来ましたというラフな格好になっている。この人の場合は気品が隠し切れていないから、何を着ていても印象に大差がない。

変化がないのはゴージェイエ総督だけで、相変わらず陛下の椅子の近くに立っていた。

——ということはやっぱり、この人達と一緒に座りたくないんだわ。

皇帝と皇族が集うテーブルである。ゴージェイエ総督にしてみれば、もし椅子を勧められでもしたら、断るのに胃が痛くなる案件なのだろう。

「おはようさん。よく眠れたか？」

「おはようございます、アロイス様。おかげさまでたくさん休ませていただきましたわ」

アロイスに椅子を引いて座らせてもらったあと、マティス陛下やグレゴリーとも挨拶を交わした。

「すまんなあ、嬢ちゃん。昨日はいらん話をしちゃって」

「我らのせいで疲れが取れぬようであれば、アロイスに顔向けができぬところであつた」

昨夜とは打って変わって和やかな空気が流れる中、朝食が運ばれてくる。

彩りが美しく、そしていい香りだ。

「皆様、昨夜はどのようなお話になりましたの？」

私だけ中途半端に席を外してから、どんな結論になったのだろうか。

彼らの雰囲気からして、悪い話にはなっていないようだ。

「うむ。そなたは神殿にも皇宮にも、どちらに入らずともよい。ただ、その身の置きどころについては我らに関わらせてもらいたい」

「嬢ちゃんに守りをつけないで放つとしたら、捕まえて利用しようって輩が出てくるからな」

「……作り物の聖女だと、事実を公表すれば解決するのではなくて？」

これには私以外の全員が首を横に振った。

「そなたの来訪に合わせて瘴気が消えたのも事実だ。作り物であると広めても、誰も本気に取らんよ」

やはり「なんか勝手に消えてくれてラッキー！」という話では片付かなかったか……！

「アロイスによると治癒師になることも検討しているとのことだが、雇い主に力がなくばそなたを守り切れまい。しかし力があつた場合は、それはそれで妙な欲を出しかねん。ゆえにそなたの身柄は引き続き、アロイスに任せるのがよからう」

「えっ……よろしいんですの!?」

「ウェルディエ皇国皇帝の名において、そなたの後ろ盾となることを宣言する。何かあらば皇国が

敵に回るということを周知し、なおかつアロイスの庇護下にあるならば、自由に行動して構わぬ」
どきどきしながらアロイスの顔を見ると、彼はニヤリと笑って頷く。

「無用ないざこざを避けるには、それが一番いいだろうという結論になった。俺が保護者で、陛下が後盾。ただ、ひとつ難点があつてな」

「難点？」

「俺はこの国に長居はしない。移住を希望していたあんたにとっては、そのところが不本意だろうが」

「そのようなことはありませんわ！」

食い気味に否定した。

だって私がウエルディエ皇国に行きたいと望んだそもその理由は、ここがアロイスの生まれ育った国だからだ。

ロラン王国から逃げるとしたら、行き先はずっと興味のあつたアロイスの国がいい——ただそれだけの理由だったので、長居できないことを残念がるほどの執着^{しやくちやく}はない。

その後はとんとん拍子に話が進み、私はどこかの家のお抱えではなく、アロイスの隊商の専属魔法使いになることが決まった。

「また不便で面倒な旅暮らしをさせることになるな」

「とっても嬉しいですわ！ どうかわたくしを皆様の旅にお連れくださいまし！」

仲良くなったジゼルとリュカ。肝^{きも}つ玉母^{たま}さんみたいな薬師のエディット。頼もしい相談役の

ヒューゴや、アロイスの右腕であるエタン。賢^{かしこ}くて可愛いミュリエル。

みんなとお別れしなくてもいいなんて、こんなに素敵なことはない。

旅暮らしは確かに輝かしい体験ばかりではないだろう。まだ私の遭遇^{そうぐう}していない大変なことが、きつと数え切れないぐらい待ち構えているに違いない。

その苦難を分かち合う仲間の中に、私を加えてほしかった。

「あと、陛下と親父殿のことをそれほど怒らんでくれ。まず疑つてかかるのは、皇族としての習^{なら}性^{しょう}のようなものなんだ。そのせいで昨日は不愉快な思いをさせてしまったが……」

「もちろん、仕方のないことと理解しておりますわ」

最初の一步目を躓^{つまず}くことなんて、誰にだってあることですよね。

ちゃんとこちらの願いを聞いた上で謝つてくれたのだから、今回は水に流しますとも。

私が笑顔でそう言うと、マティス陛下とグレゴリーと何故かゴートイエ総督までがホツとした顔になった。

ウエルディエ皇国の皇族は、みんな気遣い屋さんなのだろうか。

先代の皇帝は性悪だったという話だし、たまたまこの人達が話しやすいだけかしら？

ともあれ心配事が片付いたからか、朝食がますます美味しく感じる。

私にとっては隊商のみんなと一緒に食べるパンとスープが、この世で一番の食事だけれど。

マティス陛下とグレゴリーは、ゴートイエ総督とともに平原の調査を行うらしい。

アロイスは次の町へ出発する前に、ロラン王国から持ってきた品を捌くそうだ。

「もう少ししたらジゼルがあんたを迎えに来る。モニークの町はあんたにとって珍しいものだらけだろうから、楽しみにしておけ」

「もしや、町を案内してくださるの？ 嬉しいですわ！」

うっきうきで部屋に戻り、はたと気付いた。

「品を捌くとは、どのようかしら？」

ここで私は初めて、アロイスの『商人』設定に対する先入観を自覚した。

道の上に布を敷き、さまざまな品を並べ、のんびり客を待つ露天商。

あるいはテントのような仮設店舗で、道行く人々に呼びかける。

それが私のイメージする『商人』の姿だった。

でもあの物語の中に、そんなシーンなんてあったろうか。

首をひねっている私に侍女が待ち人の到着を告げ、すぐに部屋の中に通してくれた。

「セレ様、おはようございます！」

「ジゼル！」

ニコニコ笑顔の彼女に、私も軽く飛び上がって喜んだ。

「頭領から聞いてますよね？ 今日と一緒に町を回ろうと思ってお迎えに来ました」

「もちろん伺っておりますよ。すぐ準備しますわね」

侍女がささっと取り出した耳付き帽子を被せてもらい、いざ、お出かけ。

廊下に出ると、そこにはリュカが待っていた。

それからゴートイエ総督の命を受けた護衛兵が数名、一緒に来てくれることに。

現時点では私の存在がきちんと公表されていないので、守りは厳重にしておかないといけないらしい。

それにしても、ジゼルとリュカも実は平民ではないのだろうか？

二人の背景を想像していたら、察しのいいリュカが「違いますよ」と慌てた。

「俺らは平民ですからね！ お偉い人と商売することもあるんで、ちゃんと行儀のなってる奴がそこそこ多いだけで」

「それを聞けて安心しましたわ。ところで皆様は普段、どのようにお仕事をしてらっしゃるの？」

「あたしが相手にするのは大店の店主とか、だいたいは商人ですよ。特にこのぐらい大きな町だと、商人用の取引所があつてですね——」

通りすがりの人々がフラリと立ち寄る場所ではなく、商人同士が取引を行うための市場。

そこでさまざまな情報交換も行いながら、仕入れた品を売り、あるいは必要な物を購入する。

聞いていると、彼らは私の貧相な想像より、遥かに専門的なやり取りをしているみたいだった。

「頭領やヒューゴさん以外は大抵、荷運びやつてるだけですけどね。ここの取引所は気難しい奴が多いんで、もし見たかったら別の町でセレ様にも見せてくれると思いますよ」

「もちろん、見学させていただきたいですわ」

なんの役にも立たない置物と化しそうですが、でも見てみたい。